



窃盗犯が刑事と出会い、更生するまでを描く、ヒューマンドラマ。

庭のヒマワリが朝露を受け、朝日の中でキラキラと輝いた。
薄く差し込む太陽の光。
もやがかかったような、どこかノスタルジックを想わせる情景。

そう。あの日もこんな雨上がりの霧立つ朝だった。
真司との出会い。それは6年前に遡る。

原田真司。まだ彼は当時16歳だった。高橋刑事は海老名署でスリ、万引きを専門に扱う刑事の職についていて、その日は非番だった。夜勤明けなこともあって、朝からオープンしている餃子チェーン店で半ちゃんラーメンを食べていた。

妻からおみやげを頼まれていた高橋刑事は、餃子を2皿と3皿別々に詰めてもらっていた。

2皿は自分が食べる分で、もう3皿は妻の真由美、子供の分だった。
財布を取り出そうと左ポケットに手を入れたとき、すられていることに気が付いた。

自分がテーブルに座ってから、まだ10分も経っていない。
誰も店から出ていないので、犯人はこの中にいる。そう確信した。

高橋刑事は、店に入ってから、今までの動線を思い浮かべた。
店に入ろうとしたとき、あとから来た老人と店の入り口でぶつかった。

そこで財布を落とし、左ポケットにしまった。
老人はラーメンと餃子を注文し、何食わぬ顔で椅子に腰掛けた。
高橋刑事は、真っ先にこの老人を疑ってかかった。

しかし証拠がない。
老人の前にラーメンと餃子が運ばれ、老人は割り箸を2つに割った。
こうして注意深く見ると、誰も彼もすべてが怪しく見えた。

しかし高橋刑事のそばを通ったのは、ごくわずかな限られた者たちだけだ。
高橋刑事は老人の隣に席を移し、老人に話しかけた。

70くらいの少し腰の曲がった老人は、ラーメンを食べる手を休めず、高橋刑事の世間話の相手になった。

どうも違うようだ。本能的に悟った。
刑事の勘で。高橋はその場から離れた。

高橋刑事は店長を呼び、事情を話した。
自分が警察官であること。そしてこの中にスリの犯人がいること。
現行犯で今なら捕まえられること。同意を得て、持ち物検査をさせてもらうことにした。店長は協力的で、客に事情を説明し始めた。

持ち物検査に反対する若者もいた。
「失礼じゃないですか？ 人を犯人扱いして」
持ち物検査に応じない若者は、もし犯人が特定できなかった場合、署までご同行いただくつもりでした。

持ち物検査に応じてもらった人から順に、目視をした。
体をさわり、持ち物を検査した。

老人が一番始めに持ち物検査を受け、何も怪しいことがないことが確認された。
もしも持ち物検査をして、何も出てこなかったら、それはそれで大変なことになる。

場合によっては減給。
懲戒処分の対象にもなりかねない。

でも高橋も刑事の端くれだ。
自分の判断に狂いはないという自信があった。

どちらにせよ、さっきまで財布はあったのだ。老人とぶつかり財布を地面に落とす前まで、財布は高橋刑事の左ポケットにあった。持ち物検査が3人行われ、その最中、トイレに立とうとした若者が呼び止められた。

その男が原田真司、16歳だった。
男は時間がないので今すぐ帰りたいと申し出た。
高橋は仕方なく、奥の手を使った。

「その場を動かさないでください。あと数分で終わります」
トイレに行こうとした原田を呼び止め、その場に静止させた。
実を言うと、小銭入れには小型の発信器が仕込まれていた。

持ち物検査をしながら雑談を交わしている間中、高橋刑事は客、一人一人の目の使い方、表情を確認していた。

そして原田だけがどこか違和感を漂わせ、刑事の第6感を刺激した。

原田真司はそれはもう堂々としていて、けれど、その堂々とした振る舞いが、なぜか高橋の嗅覚に訴えた。

携帯から電波を送った。すると数秒おいて、財布が反応した。

誰も座っていないテーブル。その椅子の上から、白雪姫のメロディーが流れた。

警察官が財布をすられる、そんな間抜けはあってはならない。ありえないことだった。

隣町、厚木市の犯罪者リスト。スリの常習者の欄に、原田真司の顔は既にファイリングされていて、高橋刑事も彼の存在を知っていた。

スリ。万引き。置き引き。

要するに窃盗の常習者。

原田は厚木市では少しは名の知れた男だった。

巾着切りの真司。裏なりの真司。

その噂は隣町の海老名市にも届き、海老名署でも有名な男としてしばしば話題にのぼった。

原田は幼少期に家庭の事情で両親と離れ、15までは施設で育った。

高校には進学せず、地元の工場で働くものの、どれも長続きしなかった。

「さっきまでどこに座っていましたか？」

刑事は問いただした。原田が指さした場所は、案の定、財布が見つかった場所だった。

中身は抜き取られる前で、犯人が窃盗をあきらめたことを物語っていた。

「君、ちょっと署まで来てもらおうか？」

高橋は自分の小銭入れをガーゼで包み、持っていたビニール袋にしまった。

原田は従った。

移動には高橋の自家用車が使われ、署に着くとすぐに原田は取調室に通された。

「原田君。君がやったのか？」

開口一番、高橋が言った。

どうしてオレの名を。原田は刑事が自分の名前を知っていることに驚きを隠せずにいた。

高橋刑事は、原田にお茶をすすめた。よく温まった、しぶくて甘いお茶だった。

「どうして財布を盗んだの？」

誘導尋問にひっかかった原田は、

「お金に困っていたんです。父親が病気で」

と嘘を言った。

「君に父親はいないはずだよ」

「えっ」

原田は少し驚き、

「義理の父親のことです」

と嘘に嘘を重ねた。

高橋はあえてそれには触れずに、中学時代、原田がどのようにして学校生活を過ごしたか、そのことについて尋ねた。原田はとつとつと語った。

友人もできず、いつも教室の隅でひとりぼっちだったこと。

授業もろくにでず、保健室で待機児童として過ごしたこと。

いじめられて育ったことを原田は悲しい目で高橋に訴えた。

学校に行っても、うわばきは隠され、ジャージは落書きされ、とても安心して授業が受けられる環境になかった。

当然、授業にもついていけなかった。

学校にも行かなくなり、万引きで補導されるようになり……。

誰にも心を許すことはできなかったし、先生もあてにならないことを肌身で感じた。

「君の気持ちはよくわかる。でもしてはいけないことはいけないんだよ。わかるだろ」

原田は、たとえ殺人を犯して世間を騒がせることになったとしても、そんなことは自分にとって小さな問題だと思っていた。

自分はどうしたらいいのか。何をしたいのか。

自分でもよくわからなくなっていた。

気付いたら他人さまの懐に手を入れ、財布を盗んでいるのだから始末が悪い。

罪の意識も、罪悪感も、全く感じなかった。

悪いのはオレじゃない。社会だ。これは社会に対する復讐なんだ。

このままいったら、オレは見ず知らずの第3者を包丁でひと刺ししてしまうかもしれない。無差別殺人事件や通り魔事件をどこか心の隅で崇拜している自分を自分でも少し怖いと思った。

オレにとって大事な今は今を生きることなんかじゃない。

オレをさんざん無視してきた奴らに、自分の存在を知らしめることなんだ。

世間をあっと言わせることなんだ。

原田の野望は、どす黒い渦となって、腹の底で煮えたぎっていた。

それを知ってか知らずか。高橋刑事は今回の件を事件化することなく原田を釈放した。そして後日、原田を自宅に誘った。

北風と太陽。

高橋刑事は、原田に今一番効果があるのは、北風ではなく太陽だということに気が付いていた。だから見ず知らずの原田を自宅に誘った。当時16歳だった原田少年は誘われるがままに、高橋刑事の家へと導かれていった。

そして高橋刑事の妻の手料理に、舌鼓を打った。

手作りのハンバーグなんて2年ぶりだ。そう言って、原田はあどけない笑顔を振りまいた。

ひじきの煮付け。じゃがいもの煮っ転がし。ビーフシチュー。ポテトサラダ。

どれもお袋の味がして、原田は泣けてきた。

こうして家族ぐるみの付き合いが始まり、原田は高橋刑事の妻、真由美をお母さんといって慕うようになった。

「もう巾着切りなんかしちゃ駄目よ」

「はい」

原田は一瞬、更生したかのように見えた。

でもそれは一時的なものではなかった。

原田との連絡が途絶え、2年が過ぎた、ある朝。原田が泣きながら高橋の携帯に電話をかけてきた。

聞けば、ヤクザの財布に手を出してしまい、迷惑料を300万請求されている上に、エンコ切り（小指を詰めること）を強要されているとのことだった。原田は袋だたきに遭い、全身打撲で2週間の怪我を負った。

「相手は誰や？」

高橋刑事が尋ねた。

「亀頭組です」

原田が電話口で答えた。

「そうか。心配するな。あとはこのオレにまかせておけ」

高橋刑事は署をあとにした。

懺悔の日々、少年が犯した罪と罰。

亀頭組の若頭を昔、面倒見たことがあった。高橋は早速、亀頭組の事務所に出向き、開口一番、若頭を呼びつけた。

「頭《かしら》をだせ」

「どちらさんで」

玄関先には威勢のいい若い衆が2人。

前と後ろから取り囲み、高橋刑事をドスの効いた声で威圧した。

しかし高橋も刑事の端くれだ。そんなものに負けてはいない。警察手帳を出し、相手をにらみつけた。

「おまえらなんかに用はない。頭《かしら》を出せ言うとなんじゃ」

「ごくろうさんです。しばし、お待ちになっておくれやす」

門番の若い衆が急に下手《したて》になり、愛想笑いを浮かべて奥に引っ込んだ。

数分後、兄貴分の若衆が、高橋の前に現れた。

若頭は留守らしく、こちらから改めて連絡させますという返事だった。

高橋は署に戻り、若頭からの連絡を待った。

コーヒーをすすり、どうするのが最善か、案を練った。

連絡が来たのは、夕方5時を回った頃だった。近くのファミレスでお茶をすることになり、高橋はまたしても車を走らせた。

若頭は既に到着していて、護衛用に子分を2人、引き連れていた。

「よう。元気か」

高橋が挨拶すると若頭は急にペコペコし始めた。

「だんな、あっしは何も悪いことはしていませんぜ。お天道様に顔向けできないことは、何ひとつ。本当でさ」

「チャカ、持ち歩いておらへんやろな」

「へい。ほんま、ごくろうさんです。だんなには駆け出しの頃、よく世話になりやした。そのせつは、本当に助かりやした」

若頭は深く頭を下げた。

「で、あっしに、帯刀五郎に用事とは、なんですかい？」

ウェイトレスがオーダーを取りに、やってきた。

高橋は紅茶をオーダーした。

帯刀に何か食べるかと聞いたが、帯刀は食べてきたばかりなのでいらないと、やんわり断った

飲み物もいない、と言った。

高橋刑事は本題に入った。

「五郎。頼みがあって今日は来た。忙しいところ、悪かったな。早速で悪いが」

高橋は帯刀を見た。帯刀も小さくうなずいた。

「原田真司という若者を知らないか？ 巾着切りの原田という男だ」

帯刀は、顎に手を当てしばらく考えた。

「知らねえです。そいつが何か？」

「どうも原田が、おまえさんとこの若い衆の財布に手を出したみたいなんだ」

「ヤクザもんのポケットに手を入れるとは、大した度胸だ。そいつは死にてえんですかい？」

帯刀は豪快に笑った。

なあ五郎。困ったもんだろ。そこから先は話さなくてもわかるだろ。

高橋は目で同意を求めた。

「はは一ん。うちの若い衆につかまって、ヤキを入れられたってことですかい？」

「どうも金を請求されているみたいだ。あと小指もよこせと言われているらしい」

「金額は？」

指を3つ、目の前に差し出した。

「3本ですかい。そりゃあ困りやしたね」

帯刀が大きく息をはき出した。

「だんなの頼み事とはいえ、これは若い衆のシノギがかかってる。若い衆のシノギを取り上げちまったら、頭《かしら》の面目が立たねえ。組が成り立たなくなっちまう。おまんまの食い上

げでさあ。これっばかりは、どうにもならねえ」

帯刀は言った。

「五郎。おまえ16で、この世界に入ったよな。関東幻夜連合に目をつけられ半殺しにあったとき、助けてやったのを忘れたわけではあるまいな」

むむむ。帯刀が歯ぎしりをする。

あのときはバットで袋だたきにあい、警察に間に入れてもらって危うく命拾いした。

頭を48針縫い、右手を2カ所も複雑骨折した。

命の恩人が、今まさに目の前にいた。

「鉄砲玉だったおまえが、命を落とさず今日まで生きてこれたのは、誰のおかげかわかってるやろな？」

「それとこれとは話がべつでさあ」

急に帯刀の威勢が悪くなった。

高橋は畳みかけた。

「おまえんとこの若い衆が拉致られたとき、関東幻夜連合に助け船だしてやったの、忘れたわけではあるまいな？」

敵対する組織は半年で壊滅した。

これもそれも、警察の大手柄があったからだ。

「うちら海老名署の血が、ようけ流れとるんやぞ。どれだけ根回ししたか」

「わかりましたよ、だんな。今回の分、きっちりつけておいてくださいよ。それにしても、だんな。その男とはどういう関係で？」

高橋は行きがかり上、ほうっておけないんだ。とだけ説明した。

帯刀は、ファミレスをあとにした。事務所に戻り、すぐに子分を集めた。

「これ以上、原田を追い込むな。これで毒落としせい」

10万円を子分に渡し、それで原田との一件は、水に流すことになった。

後日、原田から高橋に電話があった。

「300万払えなかったら、腎臓を1つ売る話が出ていました。来月の初めにも、フィリピンに渡る話がでていて、噂ですが、闇ブローカーが、オレが麻酔薬で眠っているのをいいことに、移植が効く内蔵をすべて抜き取ってしまうつもりだったとあとから聞きました。オレは殺される一歩手前でした」

それは原田の感謝の言葉だった。

しかし残念なことに原田の手癖はこれでも完全にはなおらなかった。

あるときは婦人警官の財布に手を伸ばし、ご用となった。

またあるときは置き引きでデパートで捕まり、そのたびに身元引受人として高橋刑事が駆り出された。

警察官の同僚は、縁を切ってしまえ。そう高橋に助言したが、高橋は乗りかかった船で、原田を見放すことができなかった。

やっこさんには、やっこさんなりの、苦悩があるのかもしれない。

高橋刑事は原田を実の子のように思いやった。

高橋刑事は子供を一人、亡くしていた。

高橋刑事には女の子のほかに、男の子が一人いた。が、誘拐事件に遭い、男の子は惨殺された。今から12年前の話だ。

高橋刑事に3度捕まったことのある強盗犯の仲間が、高橋の子供を見せしめに殺した。生きていれば、原田と同年だった。

「あいつは健の生まれ変わりのような気がするんだ。どこか不器用で、要領が悪くて」。

いつか家内にそう話したことがあった。

妻の真由美も、そうね、とたしかそんなことを言った。

原田は23歳になった。

従業員が6名の小さな町工場。そこの看板娘の事務員を嫁にもらい、世帯主になっていた。

結婚した翌年、子供ができ、原田も無職ではいられなくなり、派遣の仕事に就いた。給料は手取り15万円だった。

毎日、野菜中心の、質素な生活が続いたが、それはそれで幸せだった。

1つのものを3人で分けて食べ合う。そんな生活だったが、原田はうれしくて仕方なかった。

自分を頼ってくる子供がいて、そして愛する妻がいる。

やがて原田は両親が自分を置いて夜逃げした年齢になり、親の気持ちが少しわかるようになった。

原田は子供をかわいがった。
自分が不自由した分、子供には幸せを望んだ。

しかし2歳になったばかりのある日、愛する我が子はこの世を去った。
脳性麻痺だった。
言葉をおぼえたばかりだった。

生命保険で800万円の保険金を手にした原田は、300万を施設に寄付し、残り500万を頭金にして小さな団地型のマンションを買った。

親が貧乏を嘆いていたために、子供が身代わりになって親を助けたのではないか。そう思えてならなかった。

原田は高橋刑事に手紙を書いた。
今まで歩んできた自分は間違いだったこと。
これからは人の役に立てるよう、生き方を変えてみせると。
そう短かく記した。

若いうちは、多少の勇み足があるくらいでちょうどいい。
出過ぎて、邪魔だといわれて。
生意気だって言われて。
でもそれくらいで、ほんとちょうどいいのかもしれない。

どこにいるのかもわからないくらい息をひそめて、自分を殺して。
そんな必要がどこにあるのかと思う。

団地の庭に一輪のヒマワリが咲いた。
ヒマワリは、誰に指図されるわけでもなく、時期がくればひとりでに花を咲かせた。

きれいだななんて言われることを望まず、まわりの草木に干渉することもせず、ただ揚々と誇らしげに根を張った。

翌年、原田は第2子を授かった。
子供を原田は直人と名付けた。

まっすぐな子供に育ててほしい。

願いはただ一つだった。

今の自分には、あの頃と違って大切に思える家族がいる。

原田は遠く空を見上げた。

大切なものが心に芽生えたおかげで、まわりを優しい目で見つめることができた。

人には転機がある。

その時わからなくとも、振り返って、あのときがターニングポイントだったといえる、そんな時機、チャンスがある。

かけがえのない人との出会いも、まさにこれに当たる。

原田は高橋刑事に感謝した。

感謝の気持ちを持つことなど、昔の自分では考えられないことだった。

原田は生まれて初めて先祖の墓参りをした。

今までは自分を大きく見せようとしていた。

タンポポで、ヒマワリの花を咲かせようとしていたんじゃないか。

ふとそんなことを思い浮かべた。

原田は巾着切りとは縁を切った。

誰かを悲しませる自分を恥ずかしいことだと思うようになり、行動を戒めた。

風が原田の頬をやわらかくなでた。

遠くで小鳥のさえずりが聞こえた。

隣人が庭で草をむしっている。

自分のためでなく、産まれてきた子供のためにも。

これ以上、誰かを悲しませるのはやめよう。

心に誓った。

亡くなった脳性麻痺の子供のためにも。

新しい家族のためにも。

家族が前を向けなくなることは慎むべきだと思った。

原田は空を仰いだ。

そこには雲一つない青空が広がっていた。

自分は生かされているのかもしれない。

そのことに原田は気付くのでした。